

## 青森から移設された渋沢栄一・渋沢敬三の銅像

深谷市では、「青淵渋沢栄一先生像」および「祭魚洞渋沢敬三先生像」の銅像を青森県の株式会社三沢奥入瀬観光開発から寄附を受けて深谷市内に移設・設置し、お披露目式を渋沢栄一の祥月命日である11月11日に行いました。



銅像名「青淵<sup>せいえん</sup>渋沢栄一先生像」

設置場所 深谷市役所 西側市民広場

作者名 彫刻家 朝倉<sup>あさくら</sup>文夫 (1883～1964 年)

「東洋のロダン」と称され、彫刻家ではじめて文化勲章を受章。深谷市に設置された渋沢栄一像は、栄一の三回忌にあわせた 1933 (昭和8) 年に制作されて現在も日本銀行本店にほど近い常盤橋公園に建つ「青淵渋沢栄一像」と同じ姿です。

素材 銅像:青銅(ブロンズ) 台座:御影石

大きさ H 約 7.3 m (うち銅像 約 3.4 m)

石台座 (最大) W 約 1.9 m × D 約 1.9 m ※大きさは確定値

重さ 銅像 1.1 t、石台座 28 t

銅像名「祭魚洞<sup>さいぎょどう</sup>渋沢敬三<sup>けいぞう</sup>先生像」

設置場所 旧渋沢邸「中の家」 正門南側

作者名 彫刻家 西<sup>にし</sup>常雄<sup>つねお</sup> (1911～2011 年)

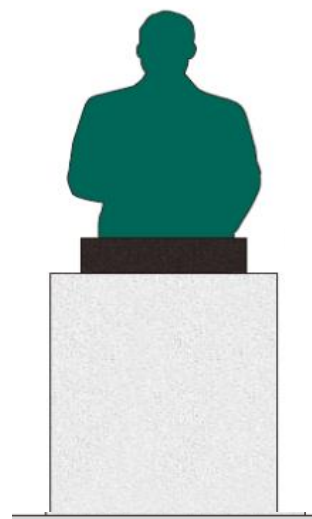
東京美術学校で朝倉文夫に学び、在学中に帝展に入選。中原悌二郎賞受賞。多摩美術大学教授を務めた。深谷市に設置された渋沢敬三像は、杉本行雄氏の依頼により 1995 (平成 7) 年に制作されたオリジナルな作品で、還暦 (60 才) 頃の敬三の姿です。

素材 銅像:青銅(ブロンズ) 台座:御影石

大きさ 約 5 m (うち銅像 約 2.2 m)

石台座 (最大) 約 2.1 m × D 約 1.3 m ※大きさは確定値

重さ 銅像 0.4 t、石台座 23 t



ご寄附として、株式会社三沢奥入瀬観光開発から青淵渋沢栄一先生像と祭魚洞渋沢敬三先生像を、深谷ライオンズクラブ (結成 50 周年記念事業) および清和綜合建物株式会社から移設経費の一部を賜りました。併せて、企業版ふるさと納税による寄附やまちづくり振興基金を活用しています。関係各位のみなさま誠にありがとうございました。

## ○銅像の人物

### 渋沢栄一 (1840～1931) 雅号：<sup>せいえん</sup>青淵

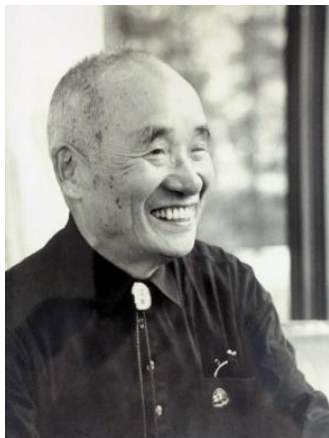
現在の深谷市血洗島の農家に生まれ。麦や藍、藍玉製造など家業を通じて父の市郎右衛門から勤勉さや人への思いやりを学び、母のえいから慈悲の心と愛情を受けて成長します。従兄の尾高惇忠から「論語」をはじめ学問の楽しさを学びます。23歳頃、尊王攘夷思想の影響から幕藩体制の矛盾に疑問を抱いて企てた挙兵計画が中止になると村を出奔します。後に、一橋家および幕府に仕え、1867年にパリ万国博覧会の使節団に随行した際、欧州先進国の社会制度・思想・文化などに大きな影響を受けます。帰国後に静岡で商法会所を設立、1869年に明治政府へ租税正として仕官し、近代化を推進する多様な制度の整備に尽力します。1873年、退官後に第一国立銀行を設立し、全国に近代的な銀行を普及するなど約500の会社設立や育成を行い、興した産業の多くは現代社会の礎となりました。この他に約600の社会公共事業、福祉、教育に関わり、1931年に91歳で亡くなるまで国際親善にも貢献しました。



### ○栄一翁の孫で渋沢家を継いだ偉人

#### <sup>けいぞう</sup>渋沢敬三 (1896～1963) 雅号：<sup>さいぎょどう</sup>祭魚洞

渋沢栄一の孫として東京深川に生まれました。17歳の時に栄一から跡継ぎに指名され、以降は随伴しながら栄一の事業を継承しました。栄一が帰郷の際には同行し、旧渋沢邸「中の家」をたびたび訪れています。東京帝国大学卒業後に横浜正金銀行や第一銀行を経て、日本銀行総裁、大蔵大臣を務め、戦後の日本経済の重責を担いました。一方で民俗学などを深く研究し、文化活動に尽力し、学術団体や研究者も支援しました。併せて、『渋沢栄一伝記資料』（全68冊）の編纂を行い、栄一の功績を広く世に伝えました。



### ○渋沢栄一と渋沢敬三に仕えた「北の観光王」

#### <sup>ゆきお</sup>杉本行雄 (1914～2003)

杉本行雄氏は渋沢栄一の書生、渋沢敬三の秘書及び渋沢家の執事を務めました。敬三の命により「三本木渋沢農場」の事業清算のため青森県に移住し、三本木商工会議所会頭などを経て、現在の三沢市古間木（ふるまき）にて温泉掘削に成功し「古牧（こまき）温泉」と命名。株式会社古牧温泉渋沢公園や十和田観光開発株式会社などを経営し、三沢や奥入瀬に温泉施設と文化施設の総合観光リゾートを創出し「北の観光王」と呼ばれました。

## ○渋沢栄一と青森とのつながり

渋沢栄一と青森県との縁は、「三本木渋沢農場」の経営に渋沢栄一が携わったことによります。

1888(明治 21)年に渋沢栄一が会頭を務める第一国立銀行の盛岡支店八戸出張所を廃止した際、三本木原の開拓事業を行う「三本木共立開墾会社」から担保した株券を見つけ、株券と予約開墾地を栄一が自ら預かったことに始まります。

三本木原とは、現在の十和田市を中心に、三沢から奥入瀬周辺までに広がる平坦な洪積台地で、新渡戸傳(つとむ)とその一族が中心となって荒れ地の開墾を行っていました。(ちなみに新渡戸傳の孫には新渡戸稲造がいます。)

その偉業を村人たちが引継いで開墾を続けていましたが、難事業に経営は悪化します。銀行の力不足もあり、栄一は救済するために自らで開墾会社の株を引き取って土地を取得し、農場として経営することに決め、1890(明治 23)年に三本木渋沢農場を設立します。



農場では、農場長を雇い、入植者を受け入れて開拓をすすめ、植林や馬の飼育などを進めます。

栄一も 1895(明治 28)年と 1908(明治 41)年に農場を訪れています。

渋沢敬三は、1915(大正 4)年から渋沢農場を引き継いだ後、三本木原開墾の国営事業化を目指した地域活動の支援を行います。また、戦後の農地改革に伴う農地解放等により、渋沢農場を閉鎖することとし、その事業清算を杉本行雄氏に任せました。

そして、渋沢農場は 1952(昭和 27)年に解散しました。また、この地域の国営開墾事業は 1963(昭和 38)年に、全体は 1966(昭和 41)年に完成に至りました。



上記画像:渋沢農場(矢内尚志編『十和田湖と現代の三本木町 写真帖』三本木商工業振興会、1926 年)

## ○銅像の移設経緯

＜青森県古牧温泉に設置＞

1991(平成 3)年 杉本行雄氏が東京三田綱町の旧渋沢邸(大蔵省管理)を国から払い下げて、青森県へ移築し、1992(平成 4)年に落成披露式を行う

1994(平成 6)年 9月渋沢公園祭魚洞庭園へ青淵渋沢栄一先生像建立、11月渋沢神社竣工

1995(平成 7)年 3月祭魚洞渋沢敬三先生像建立、4月渋沢栄一・敬三の銅像除幕式を行う

1995(平成 7)年 銅像除幕式後のようす



上記画像:株式会社三沢奥入瀬観光開発

＜青森から移設＞

2020(令和 2)年 旧渋沢邸を清水建設株式会社が譲り受けて解体収去工事はじまる

2023(令和 5)年 旧渋沢邸の清水建設株式会社(東京都江東区)へ移築・復原が竣工

2024(令和 6)年 株式会社三沢奥入瀬観光開発が深谷市へ銅像2体を寄附

2025(令和 7)年 銅像を深谷市へ移設・設置し11月11日渋沢栄一翁の祥月命日にお披露目式を行う



2025(令和 7)年 銅像お披露目式除幕のようす



○移設前：青森県<sup>こまき</sup>古牧温泉 渋沢公園・祭魚洞庭園のようす

青淵渋沢栄一先生像

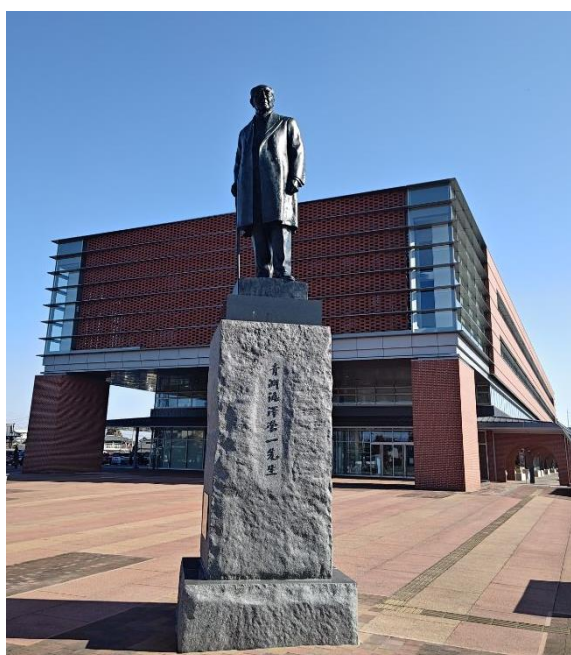


祭魚洞渋沢敬三先生像



○移設後：深谷市のようす

青淵渋沢栄一先生像



深谷市役所

祭魚洞渋沢敬三先生像



旧渋沢邸「中の家」